

(別紙様式)

都道府県番号	3
都道府県名	岩手県

( )

・学校名及び規模

北上市立黒沢尻北小学校										
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数	
学級数	4	4	4	4	4	4	0	24	34	
児童数	130	138	143	142	138	135	0	826		

・実践研究の概要(テーマ及び設定の趣旨)

<p>・テーマ 個に応じた指導のための学習材の工夫 - 国語科・算数科の指導を通じて -</p> <p>・テーマ設定の趣旨</p> <p>(1) 学力検査の結果や日常の学習の達成状況をみると、基礎・基本が確実に定着しているとは言えない状況である。その要因として、以下のことがあげられる。 ア 児童一人一人の実態に応じた教材開発や指導体制の確立が不十分であり、また、それらを進めるための時間の確保が十分でないこと。 イ 児童の日常的な学習習慣に個人差があり、その実態に応じた指導を意図的・計画的に進めるためのシステムが十分に確立していないこと。</p> <p>(2) これまでの一斉授業では、すべての児童に学習内容を完全に定着させることができない場合もあり、児童の理解が十分に深まっているとは言えない状況であること。 このことから、学習した内容を次の学習に生かすことができないことが見られること。</p> <p>(3) 「読み・書き・計算」など、最も基礎的な力が十分に定着していない児童がおり、このことが学習意欲の低下につながっていることがうかがえること。</p> <p>(4) 学力向上の取組を意図的・計画的に推進するため、中学校や保護者、地域との連携を図る機会と場を設ける必要があること。 このような課題を解決するため、本テーマを設定した。</p>
---

・実践研究の内容について

( ) 研究体制の工夫

- ア 児童の学力分析及び学習に対する意識調査を行い、児童の実態を把握するとともに学習指導の改善を図るために必要な資料を得る。
- イ 児童一人一人の確かな基礎・基本の定着を図るために、国語科・算数科を中心に学習指導の工夫と改善を図る。
- ウ 新学習指導要領に基づき、基礎・基本の内容を確認する。また、その単元の指導

を通して、児童に身に付けたい力を明らかにする。

エ 児童一人一人のレディネスを把握し、個を生かすための学習材の工夫と活用を図る。

オ 児童の意欲的な学びの在り方について検討する。

( ) 実践研究の内容

(1) 児童の学習に対する意識調査の結果から

約半数の児童が日常の学習への負担感を感じており、特に学習内容が十分に定着していない児童ほどその割合が高い～全体で55%、下位の児童で66%

学習したことが「わかる」と実感している児童の割合は、下位の児童ほど少ない

「国語の授業がよくわかる」～上位：40% / 下位：24%

「算数の授業がよくわかる」～上位：47% / 下位：33%

家庭での学習習慣が十分に定着していない～家庭学習の時間が30分以下の児童が全体の62%を占めている

読書をしたり新聞を読んだりする児童が少ない～読書をしない児童：46%

調査結果から、本校児童の課題として、「進んで」又は「意欲的に」学習する習慣を身に付けさせていく必要があることがあげられる。また、学習に対する意欲は、確かな基礎・基本の定着を図るための重要な要素であると考え、本校の研究仮説に「学ぶ喜び」として位置付けることにした。

【授業実践例】～6学年・算数「分数のかけ算とわり算」

ア 実践の概要

- 単元の指導計画の見直し 単元のまとめの時間でコース別選択学習を設定 (3時間)

診断テスト(事前)の実施 ～教師の作成した問題により、児童の計算技能の定着度を把握する

テスト結果から自分なりの課題を把握 ～課題意識をもたせる

3つのコースから1つを選択 習熟 ～学習材として、それぞれのコースに応じた問題を作成する

自己評価 ～必要に応じてコースの変更

診断テスト(事後)の実施

- 児童が学習を進める際、自分なりの目標をもって取り組めるように、それぞれのコースでは3段階のプリントを用意した

イ 実践の結果と考察

- 診断テストは、分数の乗除計算25問を教師の自作により作成した。実践を試みた学級の平均点は、事前テスト69点、事後テスト82点と確実に点数を伸ばしている。特に、事前テストの結果がよくなかった児童の得点が伸びていた。
- 児童の多くは、課題意識をもって自分に合ったコースを選び、目標を立てて学習に取り組む様子がみられた。児童の自己評価から、「計算のスピードが速くなった」、「集中して学習に取り組むことができた」といった感想が得られた。
- 本実践は、単元の終末部分においてコース別選択学習を取り入れたが、単元全体においてコース別選択学習を展開することも可能であると考え。また、支援表への書き込みを積み重ねていくことで、児童一人一人の伸びを確実にとらえることができたと考え。

(2) 児童一人一人の確かな基礎・基本の定着を図るための学習指導の工夫と改善

【授業実践例】～4学年・算数「わり算の筆算(2)」

ア 実践の概要

- ・ 学習材及び指導体制の工夫

4学級を3コース・5グループ(習熟度別)に分けて授業を行う

事前テストを行いレディネスを把握するとともに、児童の希望を生かしながらグループ編成を行った。(自分の力を自ら判断できるようにする)

3つのコースは、次のように学習材を工夫・活用した

a～半具体物・ブロック等の操作と筆算を結び付けて課題解決をする(1グループ)

b～前時までの学習内容を想起させながら課題解決をする(3グループ)

c～本時の課題意識を高めるために、導入問題を3問出す。また、練習問題を解く時間を多く確保する(1グループ)

単元配列の工夫

わり算では商の見当を立てる必要があることから、「がい数」を先に学習することを試みた

- ・ 指導者による毎時間の授業の進め方の確認とワークシートの作成
- ・ 児童の学習状況や達成状況についての情報交換

イ 実践の結果と考察

- ・ それぞれのコースで、児童の実態に合った授業を進めることで、同じグループに属する児童が自分に合ったペースで学習を進めることが可能になった。

また、授業でわからないことを「わからない」とはっきり言える態度も育ってきた。

- ・ 単元末テストの平均点は80%であった。個々の児童に目を向けた時、これまでのテストが50～60%程度だったが、本単元では75%以上に伸びた児童も何人かいた。
- ・ コース別学習にしたことで、学級の枠を越えて学習する新鮮さが児童の意欲の喚起につながった一方で、指導者間で児童の情報交換を密に図らなければならないことや、朝学習、家庭学習との関連を図りにくいことが課題として残った。

( ) 成果と課題

ア 成果

- ・ 授業実践を通して、学習材の工夫と活用を図ることにより、児童は意欲的に学習を進めることができた。

評価テスト等においても、その成果を発揮している児童が出てきた。

- ・ 個に応じた指導の在り方を追究していくなかで、課題別、習熟度別など少人数指導体制についても検討を進めることができた。これまでの一般的な授業形態から脱却し、指導を行ったことにより、指導者側の意識を大きく変えることができた。

イ 課題

- ・ 個に応じた指導のための学習材の在り方について更に検討を深めるとともに、指導をより焦点化し、児童の定着状況を確実に見取るための手立てを講ずる必要がある。
- ・ 中学校や保護者、地域との連携を図る機会と場を意図的・計画的に設けることが必要である。

( ) 成果の普及方策

ホームページの開設について前向きに検討中である。